［特集］ 授業実践報告

# 「どこでもドア」で PBL

## 台湾東海大學との協働学習

愛知県立大学外国語学部　東　弘子

### 1. はじめに

世界的規模のパンデミック Covid-19 の感染拡大により、2020 年度の全ての授業運営は、急遽、大幅な予定変更を迫られた。中でも、感染予防策として人と人との接触を極力避けることが求められる「新しい日常」において、学外者との対面交流を通して学習するスタイルを基盤とした科目においては、根本から授業計画を変更せざるを得ない状況となった。そうした授業は本来、一定の時間をかけて学外組織と協力し準備を進める必要性がある。筆者は、5 年間継続実施してきた、インドネシア人介護福祉士候補者との交流活動を軸とした授業の開講に際し、大きな困難に直面することとなった。

本稿では、2020 年度後期に実施した、愛知県立大学外国語学部国際関係学科の専門科目「プロジェクト型演習」B クラス（授業担当者：東弘子）の、計画変更の経緯と授業実践の概要を報告する。プロジェクト実践による授業において、活動方法と内容を変更しても、元来の授業目標を変更することなく、学生の学びを担保するために「今、可能なこと」を模索して、取り組んだ記録である。

### 2. 「プロジェクト型演習」B クラスにおける活動内容変更の経緯

2015 年度に設置された「プロジェクト型演習」は、学科においてすでに実施されてきたアクティブラーニングを、カリキュラムの中で可視化することで国際関係学科の特徴を打ち出した 2 年次生を主対象とする科目である[1]。毎年 4～5 種類の異なるプロジェクトで複数クラスが開講されている。筆者は、科目設置された 2015 年度より 2019 年度まで、毎年当該科目のうちの一クラスを担当してきた。筆者のクラスでは、EPA（経済連携協定）の枠組みで来日しているインドネシア人介護福祉士候補者との 3 ヶ月間のさまざまな交流活動を通じて、他文化および自文化を知るとともに、日本社会で今後活躍していく外国人材と直接関わることで、国際化・多文化化する日本の社会的課題を身近な問題として捉えるようになる、という目標を立てている[2]。

2020 年度も、引き続き交流活動を実施する予定で、EPA 介護福祉士候補者の集団研修受入機関となっている一般財団法人海外産業人材育成協会 The Association for Overseas Technical Cooperation and Sustainable Partnerships（以下本稿では「AOTS」とする）の中部事務所（愛知県豊田市）と、例年通りの調整を進めていた。ところが、

---

[1] 科目の詳細と具合的な実践事例については、亀井ほか(2019)参照。

[2] 詳細は東(2019)参照。

感染拡大に伴う水際対策としての外国人入国制限により、4 月以降、当初 6 月に入国して研修を開始する予定だった介護福祉士候補者たちの入国時期の目途が立たず、AOTS としても、研修カリキュラムの見直しを検討するものの、候補者たちの来日時期については判断ができない、といった状況になっていた[3]。候補者が来日できたとしても、「三密の回避」と言った観点から、これまで実施してきた教室内ディスカッションやプレゼンテーション、エクスカーションツアー、調理実習などの活動を、従来通り実施することは不可能である。しかし、7 月末には履修説明会で授業概要を示さなければならない[4]。こうした事情から、遠隔元年 2020 年度前期授業が開始となった 5 月初旬には[5]、このクラスの活動を一旦白紙に戻し、別の計画への変更を決断することとなった。

折しも、「プロジェクト型演習」とは別に、台湾の東海大學日本語言文化學系の学生の長期休暇を利用したスタディツアーを、本学で実施する計画を進めており、筆者はオンライン会議で打ち合わせを重ねていた。台湾では感染拡大の封じ込めが成功し、感染予防策をとりながらも大学の授業は全て通常通り対面実施され、日本訪問もそれほど非現実的ではないと捉えられていた。しかし、この計画も、日を追うごとに、2020 年度の実現可能性が低くなっていた。東海大學では、10 年来継続して、日台の学生交流のツアーをいくつかの日本の大学と協力して実施してきている。日本・台湾いずれで開催する場合においても、単なる語学研修ではなく、日台それぞれの地域における社会的課題を探るテーマを掲げ、学生がスタディツアーを計画し、協働活動を実践してきたという。2020 年 3 月には、鹿港（台湾）での日台スタディツアーも感染拡大の影響を受け開催直前に中止となり、その後も国際的な移動制限の解除の糸口が見えない中で、東海側の教員には、日本の学生とともに学ぶ機会を創出したいという強い希望があった。そこで、今、可能な交流活動の形として、この「プロジェクト型演習」を活用し、オンライン会議システムでの討論による学生交流を提案したところ、東海大學の教員から賛同を得ることができた。

このクラスで、当初予定していたインドネシア人介護福祉士候補者との交流活動を通じて学習目標としていたのは、国際化・多文化化する日本の社会課題を身近な問題として捉える、意識化することである。台湾の学生との討論で、そうした目標を達成するためには、オンライン交流において日本語でおしゃべりするだけでは不十分であると考え、何らかの社会的課題を討論のテーマに掲げることにした。教員間で検討を重ね、当初の授業計画と関連する「外国人に

---

[3] AOTS 担当者によれば、豊田市で研修を受ける候補者たちは、2020 年 12 月に無事入国できたという。入国したものの、活動の制約が例年よりも大きい中、学生との対面交流が難しいため、今後はオンラインを活用した新しい形で大学生と候補者との交流を実施したいと、オファーを受けているところである。

[4] 複数のクラスが異なる内容で開講される「プロジェクト型演習」は、毎年、夏期休暇に入る直前に学生への履修説明会を実施し、可能な限り希望に応じてクラス分けを行う。運営上、クラスによっては履修人数の制約があること、活動の準備期間が必要な科目があることから、後期開始を待たず履修クラスを定める手続きをしている。

[5] 2020 年度、大学の学年暦は「緊急事態宣言」の影響と遠隔授業対応の準備のため、例年よりも 1 ヶ月遅れで開始した。

よる介護」の問題が日台で同様に生じているが、その具体的な様相が大きく異なる（日本では多くが施設介護、台湾では家庭内介護）ことから、「介護人材等外国人労働者の調査と意見交換」をテーマとすることにした。

協働作業の概要としては、学生たちが日台それぞれの社会事情を調査しオンライン会議で討論した上で、主に介護分野の外国人労働者に関する事例を対照し、発表テーマを定めて、グループごとに日本語での音声付きスライドによる 10 分間のプレゼンテーション動画を成果物として作成する、というものとなった。

## 3. 実施スケジュールと授業内容

### 3.1 交流の事前トライアル

授業実践は後期であるが、オンライン交流そのものが滞りなくできるかどうか、ひとまず、フリーの参加者を募り、試すことにした。両大学ともに、自由な交流会の開催の知らせを教員が広報し、学生を募集したところ、本学学生（2-4 年生）6 名（国際関係学科 5 名、中国学科 1 名）、東海大學学生（2-3 年生）9 名が集まり、2020 年 6 月 19 日に Zoom 会議で 1 時間ほどのオンライン交流会を行った。全体の会議で、それぞれが準備した大学の紹介スライドを共有した後で、4-5 名の小セッションで、普段の学生生活などについて会話する、といったカジュアルな交流会であった。

事前連絡や当日の通信状況も問題なく、デジタルネイティブ世代の参加学生にとって、オンライン会議での交流の障壁は小さく、画面越しに LINE の QR コードを示して友達登録をするなど、通常の対面での交流会と同様の出会いとなっているようであった。海外へ渡航ができない時期において、国境をまたいだオンラインの交流会は大変好評であった。この交流会への参加がきっかけで、後期プロジェクトの参加につながった学生もいた。

### 3. 2 授業開始前準備

本クラスの履修者 10 名、および東海大學のプロジェクト参加希望者 9 名[6]に対し、それぞれの大学で 9 月下旬に事前説明をし、参加者確定後、教員が愛県大・東海大学生が混合する 4 つの作業グループに分けた。1 グループは 4-5 名である。この時期には、感染状況が落ち着いていたこともあり、可能ならば年度末までに相互に訪問しあうという計画も示しながら、オンラインでの交流活動のための準備を始めた。いずれの学生たちも、介護や福祉分野の制度について専門的な知識を持っているわけではないため、それぞれの国や地域における一般的な社会課題としての外国人介護労働について、可能な範囲で予備学習をしておくように推奨した。本学の学生には、台湾に関する予備知識も一定程度身につけておくように指示をした。

また、学生が活動に取り組む中で、オンライン上の操作トラブル等にも対応できるよう、機器や通信システムの知識が豊富でかつ中国語も堪能な本学の大学院生に、TA としてアシストを依頼した。

### 3. 3 授業スケジュールと授業活動・交流活動の実施方法

2020 年度、愛知県立大学の後期の授業は、このクラスも含め一部対面実施となった。全体

---

[6] 東海大學の学生は正規授業外の活動である。全員日本語を専攻とする学生で 3 年生 8 名、大学院生 1 名であった。

スケジュールは、表 1 の通りである。通常の授業時間帯の対面授業で、活動準備や交流後のふりかえりなどのタスクを行い作業工程を進め、授業外の時間帯の交流活動において協働作業をして、成果物作成に取り組んだ。

【表 1:プロジェクト型演習 B クラス 2020 年度授業スケジュール】

他文化を知る／自文化を知る「東海大學(台湾)とのオンライン交流と協働作業：外国人労働者の調査と意見交換」

| 回 | 日付 | 曜日 | 時間(日本時間) | 場所 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 9/18-22 | | | TEAMS会議 | 履修学生事前説明会　／　9月22日：東海学生説明会 |
| 1 | 10月6日 | 火 | 5限 | H410 | 授業ガイダンス　概要説明　グループ決め |
| 2 | 10月13日 | 火 | 5限 | H410 | 交流１準備 |
| 3 | 10月20日 | 火 | 19:00-20:30 | オンライン Zoom | 交流１【アイスブレイク】：グループ顔合わせと自己紹介 |
| 4 | 10月27日 | 火 | 5限 | H410 | 交流１報告　と<br>交流２準備　日本の状況の学習のまとめ(グループ内) |
| 5 | 11月3日 | 火 | 5限 | H410 | 交流２準備　日本の状況の学習の相互報告(クラス内) |
| 6 | 11月４日ー11月13日　グループで調整 | | | オンライン Teams | 交流２【討論】：日本の外国人労働の紹介と深めるテーマさがし(質疑応答や質問項目の整理) |
| 7 | 11月17日 | 火 | 5限 | H410 | 協働作業１準備　調査 |
| 8 | 11月24日 | 火 | 5限 | H410 | 協働作業１準備　調査　→　提案の枠組み作成 |
| 9 | 11月25日ー12月4日　グループで調整 | | | オンライン Teams | 協働作業１【討論】：外国人労働で比較対照するテーマを提案し定める　調査の範囲と指示を出す（つづく） |
| 10 | 12月8日 | 火 | 5限 | H410 | 協働作業１報告<br>グループ作業　プレゼン作成（スライドと発表録画） |
| 11 | 12月９日ー12月20日　グループで調整 | | | オンライン Teams | 協働作業２【討論と作業】：プレゼン作成 |
| 12 | | | | | 協働作業３【討論と作業】：プレゼン作成 |
| 13 | 12月22日 | 火 | 5限 | オンライン Zoom＊1 | プレゼン録画版完成　→　クラス内リハーサル<br>チェック　と　講評 |
| 14 | 1月5日 | 火 | 5限 | オンライン Zoom | プレゼン動画修正作業 |
| | 1月12日 | 火 | | | |
| 15 | 1月19日 | 火 | 5限 | オンライン Zoom | 合同発表会（Ａ～Dクラス）＊2 |
| 16 | 1月26日 | 火 | 5限 | オンライン Zoom | 協働プロジェクト交流会　(プレゼンと質疑応答) |

＊1　日本国内の感染拡大で大学が警戒レベルを上げたことにより、この週以降は授業活動もオンライン実施となった。

＊2　プロジェクト型演習では、学期末に開講クラス全体で集合し授業活動の成果を報告する合同発表会を実施している。

表では、交流および協働作業を網掛けでマークしてある。最初の交流会「交流 1」は全体で実施して、活動の趣旨説明をした後、ブレイクアウトセッションにより自己紹介などグループ内で相互に関係作りをした。その後、各グループが「交流 2」および「協働作業 1～3」での計 4 回のオンライン会議を経て、成果物を完成させるところまで作業を進める、最後「協働プロジェクト交流会」で、全員がオンライン会議に集合し、成果物の動画を流し、その場で質疑応答をする、

という流れである。

相互のキャンパスは国境をまたぎ、1 時間の時差に相応する物理的距離があったとしても、様々なツールを利用することで、同じ場所で同じ時間を過ごし、作業を進めることができた。本学で利用している Ms-Teams のチームに、履修学生だけでなく東海大學の学生や教員もゲストとして招待し、活動の指示や情報交換、フィードバック、ファイルの共有などを行った。オンライン会議は、全体で集合する際には Zoom 会議を利用し、学生たちのグループ会議は、Ms-Teams のチャネルでの会議を活用した。学生たち相互の日程調整や、成果物作成までの修正指示など細かいやりとりなどは、使い勝手の良い SNS、LINE を活用するなどの工夫をし、状況に応じてコミュニケーション手段の使い分けをするように指示をした。事前調査のアドバイスや動画作成等の技術的支援についても、授業内だけではなく Teams でのやりとりを通じて、教員や TA が継続的に行った。

また、クラス外の活動の状況の把握のため、進捗状況や交流における困りごとなどの情報を得るため、Ms-Forms を活用し、頻繁に学生から意見徴収をし集約した。本クラスは 12 月半ばまでは対面で実施していたとは言え、この学期は、週のうち 1 日だけが当該学生の登校日という状況であり、学生間も教員との間でもコミュニケーションが不足しがちになってしまう。それを補うためにも、Forms による回答シートは大いに役に立った。

## 4. 成果と課題

4 ヶ月間にわたる国をまたいだオンライン交流による協働学習は、初めての試みながら、最終成果物作成と発表まで、全グループが無事にたどり着いた。討論における学生間の発言の遠慮や、会議日程調整の不調など不安や困難な状況も途中あったが、それぞれの学生からの相談事を教員間で頻繁に共有しながら対応することで、トラブルを解決することができた。プレゼンテーション資料に対する指導も、内容や構成に関わることは主に筆者が、台湾の学生の日本語表現に関わることは東海大學の教員が指導するという、おおまかな役割分担を双方の教員間ですることにより、指示が混乱しないようにした。

日本では年末年始を挟み、成果発表会まで時間のない中、学生たちは、海の向こう／端末の向こうに協力し合う仲間がいることに励まされ、最後までプレゼンテーション動画の修正に、熱心に取り組んだ。過去に実施してきたプロジェクトにおいてもそうだったように、オンラインであっても「生身」の相手がいることで、自分のためだけの単なる授業課題ではなくなり、責任感を持って取り組む姿勢が見受けられた。

さまざまな試行錯誤をした結果、4 つのグループの発表タイトルは、「日台の外国人介護士が抱える問題と解決策について」「外国人労働者の不法就労問題の解決に向けて」「日台の外国人労働者に対する差別の問題について」「日本と台湾の外国人労働者が抱える問題とその対策」となった。「学期末に台湾から日本への渡航が可能になっていたら愛県大で成果発表会を実施したい」という、プロジェクト開始時の期待は叶わなかったものの、成果発表会をオンライン会議で開催したことにより、両大学の他の教員のゲスト参加もあり、充実した質疑応答がなされた。事前にプレゼンテーションを録画しておいたことで、東海大學の学生も、日本語での質疑応答に、集中して答えることができているようであった。

授業を履修した学生の声としては、日本の問題として捉えていた外国人労働を、台湾という別の地域の現状と比較することで、それぞれの社会での受け止めや具体的な課題が異なるこ

とを知り、より日本の問題を客観的に捉えるようになったというものが見られた[7]。

TA の支援も受け、いくつかのツールを使いながら授業実践をしてきた中で、課題も残されている。調査データの分析と言った研究内容に関わる指導については、別稿に譲るとして、ここでは学生への指示の共有方法について記録をしておく。今回の協働の学習活動が急遽開始したという事情もあり、東海大學の学生は、授業外の有志の活動であった。積極的に参加していても負担をかけすぎてはいけないという思いから、あくまでも授業課題となっている本学学生に、成果物の作成の責任があると筆者は考えていたため、音声付きのパワーポイントスライドの作成の段取りなど、技術的な仕上げに関する指示を、本学の学生のみに説明していた。しかしこれの説明不足が原因で、最終段階において形式的な不備の対応に追われることになった。情報のプラットフォームとなるツールを持っていながら、十分に活用しなかった自らの心的態度を反省している。多くの人が関わるプロジェクトにおいて、情報共有が成否を決める大きな鍵となる。対面で同じ場所に集うことがなくても、全体を見渡し適切な判断と指示によりプロジェクトを運営する能力を向上すべく、経験を継続的に積み、改善していければと思う。

## 5. おわりに

上記のように、2020 年度「プロジェクト型演習」における授業活動は、表面的には当初のシラバスを大きく変更した。しかし、日本語学習者との直接の交流を通して、多文化化する日本社会の課題を身近なこととして捉える、という授業の目標は、果たすことができたと考えている。

筆者は、2020 年 3 月に東海大學を訪問予定であったが、急激な感染拡大により、出発直前に渡航を断念した。本稿執筆時において、未だ東海大學への訪問を果たせないままである。しかし、オンライン会議システムは、まるで、まんが「ドラえもん」の「どこでもドア」のように、遠隔の人と人とを一瞬でつなぐ道具となった。オンライン授業が批判される向きもあるが、未曾有の社会状況の変化の中で、一年前には想像もつかなかったことが可能になっている。人と人が関わることで生じる化学反応と学生の持つポテンシャルへの信頼は、過去の授業実践の経験から得ていたものである。新たな形の活動においても、同様であったと言える。

授業運営に全面的に協力してくださった東海大學の工藤節子先生、佐藤良子先生、TA の K.Y.さん、成果発表会で学生にアドバイスをくださった先生方に、記して感謝申し上げます。

## 引用文献

東 弘子(2019)「EPA 介護福祉士候補者と大学生の交流プロジェクト― 多文化化する日本社会における人材育成の実践として－」『言語教育実践イマ×ココ』No.7、ココ出版、pp.64-74

亀井伸孝・宮谷敦美・東弘子・高阪香津美・松林康博・草野昭一(2019)「愛知県立大学国際関係学科「プロジェクト型演習」実践報告: 2015～2017 年度の 3 か年の取り組み事例」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』51、愛知県立大学外国語学部、pp.173-199

[7] こうした学習成果に関する分析は、稿を改めて論じる予定である。